

編 修 趣 意 書

(教育基本法との対照表)

※受理番号	学 校	教 科	種 目	学 年
	高等学校	公民科	倫 理	
※発行者の 番号・略号	※教科書の 記号・番号	※教 科 書 名		
35 清水	倫 理 308	高等学校 新倫理 新訂版		

1 編修の趣旨及び留意点

本書は、教育基本法および高等学校学習指導要領（第1章「総則」、第2章第3節「公民」第2「倫理」）の趣旨にのっとり、高等学校公民科「倫理」教科書として編修したものである。

▶本書の編修に際しては、上記に示された目標および「公民科」のめざす方向をふまえ、「公民科」「地理歴史科」の各科目との関連を考慮しながら、人間尊重の精神と生命に対する畏敬の念にもとづき、他者とともに生きる主体としての自己を確立するとともに、「公民」として必要な基礎的素養を培っていくことを基軸としている。

① 真理や普遍的な価値の探究

▶高校生が、人間という存在や真・善・美など普遍的な価値をめぐって根源的な問いかけを行う時期にあることをふまえ、青年期に抱くさまざまな疑問や課題について学習するとともに、古来、普遍的な問いをめぐって積み重ねられてきた先人たちの思索について探究することで、自己の主體的なあり方・生き方を確立しようとする態度を培うことをめざした。

② 人間の尊厳の自覚

▶科学・技術文明の繁栄がうたわれる反面、人間らしさや人間の尊厳の喪失の危機が指摘される現代社会において、かけがえのない尊厳をもつ個人としての自覚を育むとともに、他者もまた尊厳をもつ個人であるという認識をもち、他者とよりよい関係を築きながら、自己のあり方・生き方を確立していく姿勢を形成しようとして配慮した。

③ 国際社会の一員として

▶グローバル化や情報化の進展にともなって社会が急速に変化し、価値観も多様化している現代の国際社会において、国境を越えた人類社会の一員として、自己のあり方に広く目を向け、日本人としての自覚を深めるとともに、現代の世界におけるさまざまな課題についてともに考え、解決に向けて行動

していく態度を培うことをめざした。

④ 人間や社会について多角的に考察

▶本書の学習を通して、高校生が主体的に学習に取り組み、「倫理」における基礎的・基本的な知識を確実に習得し、自ら思考する力や判断力を養い、言語活動を通してそれらを適切に表現するとともに、他者の思考や解釈を理解し相互に尊重しながら議論を重ねるなどして、人間や社会全般について多角的に考察することができるよう配慮した。

2 編修の基本方針

本書は、教育基本法第2条に示された教育の目標を達成するため、以下の基本方針にもとづき編修している。

① 教育基本法第2条第1号に関して

▶本書では、「私とは何か」「人間とは何か」という根源的な問いを基底として、西洋・東洋それぞれの潮流における先哲たちの思考を過不足なく明確に記述することを通し、高校生が幅広い知識と教養を身に付けるとともに、人間として「よく生きる」ことに自ら思いをめぐらせ、真理を探究する姿勢と豊かな情操、道德心を培うように配慮した。

② 同第2号に関して

▶本書では、青年期における自己形成と課題の学習を通して、自己が他者とは異なる唯一の存在であり、その個性と能力を伸ばして創造性を育むとともに、他者によりよい関係を築いてゆくことの大切さを共感をもって理解することができるよう丁寧に記述するとともに、この現代社会において、自らの希望や目的を実現してゆこうとする自主・自立の精神を培うように配慮した。

③ 同第3号に関して

▶本書では、古代から現代にいたる、西洋・東洋の先哲たちの思考を系統的に記述することで、高校生が、自己と同様に他者もまた尊厳をもつ個人であること、現代の民主社会は自己と他者がともに生きる場であることを理解し、社会の一員として自己の存在を認識して、自他の敬愛と協力にもとづき、よりよい社会の形成に主体的に参画しようとする態度を養うように配慮した。

④ 同第4号に関して

▶現代社会では、経済的な繁栄と科学技術文明の恩恵を享受する一方、地球規模の環境破壊が引きおこされ、人間自身の生命も深刻な影響を受けるようになっている。本書では、仏教についての詳細な記述を通して、生あるすべての存在の一環として人間をとらえる視点を提示し、また生命への畏敬を説く先哲の思考の記述などを通して、現代の倫理的な諸課題について自らの思考を促すとともに、生命を尊び、自然を大切に、環境の保全に寄与する態度を養うように配慮した。

⑤ 同第5号に関して

▶西洋近・現代社会の価値観を根柢に成立した現代日本の社会には、アジア諸国の伝統につながる考え方や、西洋ともアジアとも異なる考え方がふくまれている。本書では、日本の先人たちが外来文化に学びながら、豊かな思想的・文化的伝統を形成していったことを記述し、それらを育んだ風土や先人たちに敬愛の念をもつとともに、日本と同様に固有の文化・伝統を有する人々を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うように配慮した。

3 対照表

図書の構成・内容	特に意を用いた点や特色	該当箇所
第1編	現代に生きる自己の課題	
第1章	冒頭に提示した「私とは何か」「人間とは何か」という問いが、自己への問いであるとともに、古来、多くの先人たちが向き合ってきた普遍的な問いでもあることを記述して、この問いへの考察を重ねてゆくことを通して、真理を探究する態度を養おうとしている（第1号）。	●第1章全て 6～8ページ
第2章	自己が他者とは異なる唯一の存在であり、青年期とは、個人としての人格を形成し、成熟を遂げて自立へと向かう大切な時期であることをふまえ、高校生がこの現代社会において自分の希望や目的を実現してゆくべきことを記述し、自主及び自立の精神を養おうとしている（第2号）。	10～14ページ、 16～19ページ
第2編	人間としての自覚と生き方	
第1章	理性にもとづいて知を愛し求めたギリシャの先哲の思考を明確に記述することを通して、西洋社会の基幹をなすギリシャ思想についての知識を身につけるとともに、人間として「よく生きる」とはどのようなことが、生徒自らの思考を促すように配慮している（第1号）。	●第1章全て 26～29ページ、 32～34ページ、 36～37ページ
第2章 第1節 第2節	一神教であるユダヤ教・キリスト教・イスラームについて過不足なく的確に記述し、また写真・地図を豊富に掲載して、人間が善き生や聖なるものを志向する存在であることに思いを至らせるとともに、現代の国際社会をうごかす大きな要因でもある宗教について、知識を身につけ理解を深めてゆくことができるように意を用いた（第1号）。	●第1節・第2節全て 38～47ページ、 48～50ページ
第3節	東洋の人々の精神形成に大きな影響をあたえた仏教について、詳細かつ丁寧に記述することを通して、生あるすべての存在の一環として（自己を含めた）人間をとらえる視点を提示するとともに、生あるものの弱さや苦を受け入れる態度を培うように配慮した（第1号・第4号）。	●第3節全て 51ページ、 57ページ、 59～60ページ
第3章	儒家、道家を代表とする中国思想の明確な記述を通し、家族から社会へと広がりゆく他者とのつながりにおいて自己をとらえる中国思想の特色を理解するとともに、よりよい社会の実現を求めた先哲たちの思考を通して、社会の一員としての意識を喚起し、社会形成に主体的に参画しようとする態度を養おうとしている（第1号・第3号）。	●第3章全て 61ページ、 69ページ
第4章	芸術は人間に生の喜びや充実感をあたえ、生活を美しくするものであること、美を通じたコミュニケーションによって、他者と心を結びつけるものであることを記述するとともに、絵画などの写真も多用して、豊かな情操と道徳心を育むように配慮している（第1号）。	●第4章全て 70～73ページ

図書 の 構成・内容	特に意を用いた点や特色	該当箇所
第3編	現代社会と倫理	
第1章	現代社会が基本的に、西洋からはじまる近代社会の延長上にあることを指摘し、西洋近代社会が生み出した思想の学習を通して人間と社会に対する理解を深めてゆくことのなかに、現代の倫理的課題の解決の方向があることを示唆している（第1号）。	●第1章全て 78～81ページ
第2章 第1節	ルネサンス、宗教改革、モラリストの思想に通底する、一人ひとりが人間として尊厳をもつという自覚や人間尊重の原理を、写真を多用しながら明確に記述し、個人の価値を尊重する態度や、創造性を発揮して個性や能力を自由に表現する姿勢を培うように配慮している（第2号）。	82～84ページ、 87～89ページ
第2節	西洋における科学的思考の展開を明確に記述する一方、東洋と西洋の自然観を対比するテーマ（「自然をめぐる思考」）を配置して、科学技術の発展が今日では新たな倫理的問題をもまねいていることを記述し、自然や科学技術について生徒自らが思考するよう配慮している（第4号）。	90～91ページ、 94～95ページ、 97ページ
第3節	民主社会の形成の原動力となった社会契約説を的確に記述することを通じて、ロックやルソーらの思考が今日の議会制民主主義の基盤ともなったことを理解するとともに、民主社会の一員として、公共の精神にもとづき社会の発展に寄与する態度を養おうとしている（第3号）。	●第3節全て 98～102ページ
第4節	カントやヘーゲルの思考、功利主義、プラグマティズムについての的確な記述を通して、個人の幸福の追求が他者や社会とも深く関連していることを理解し、個人と社会、個と全体のあり方について生徒自らの思考を促すよう配慮するとともに、自己と同様に他者を尊重し、敬愛と協力を重んずる姿勢を培うように意図している（第3号）。	103ページ、 109～113ページ
第5節	マルクス、サルトル、アーレント、ハーバーマス、ロールズらの思考、マザーテレサの活動などを的確に記述することを通じて、公正や正義、責任などを基軸として自己と他者、自己と社会のかかわりについて理解と考察を深め、現代における公共性のあり方を問いながら、主体的に社会の形成に参画し、その発展に寄与する姿勢を培うように配慮している（第3号）。	114～116ページ、 123～130ページ
第6節	生命への畏敬を説いたシュヴァイツァー、生命尊重の立場を徹底することを主張したガンディー、生命一般のなかで人間と社会を位置づけようとするペルクソンらの思考を過不足なく記述することを通じて、生命の神秘を共感をもって受けとめ、生命を尊び、自然を大切にすることを養おうとしている（第4号）。	132～133ページ
第4編	国際社会に生きる日本人の自覚	
第1章 第1節	第1章を通して、日本の先人たちが、アジア諸国や西洋の外来文化を受容しつつ、この風土に豊かな思想的・文化的伝統を形成したことを系統的に記述している。第1節では、和辻哲郎の風土論などを軸に、日本の風土の特徴、日本人の自然観・宗教観などを記述している（第5号）。	●第1節全体 142～148ページ
第2節	外来思想として移入された仏教が独自の展開をたどり、高度の学問や芸術を生み出しながら、日本人の心々に広く浸透してゆく過程を、聖徳太子、最澄、空海、法然、親鸞、道元、日蓮ら代表的な仏教者の思考を明確に記述しつつ、明らかにしている（第1号）。	●第2節全体 149～160ページ
第3節 第5節	儒教の伝来とその受容の過程を、林羅山、中江藤樹、伊藤仁斎、荻生徂徠ら代表的な儒学者の思考を的確に記述しつつ、明らかにしている（第1号）。 一方で、儒教など当時の支配的な思想を批判した思想家や都市庶民の思想についても触れ、近世における思想の展開を多角的に記述している（第1号）。	●第3節・第5節全体 161～167ページ、 172～173ページ

図書の構成・内容	特に意を用いた点や特色	該当箇所
第4節	雅び、あはれ、幽玄、わび、さびなど日本文化における美意識を、和歌や写真を提示しながら具体的に説明し、日本の伝統と文化の特色を明らかにしている（第5号）。	168～169ページ
第6節	さまざまな時代や社会状況のもとで西洋の思想・文化を受容し、深い理解を示した思想家を過不足なく紹介するとともに、たんなる受容をこえ、独自の思考を確立しようとした思想家について、的確に記述している（第1号）。	174～180ページ、 182～187ページ
第2章	第二次世界大戦後の日本の思想に触れながら、思想的・文化的伝統を尊重しつつ、異なる文化・伝統に生きる人々へ敬意をもつことの大切さを記述している（第5号）。	190～191ページ
第5編	現代の諸課題と倫理	
第1章 第2章	「生命と倫理」「環境と倫理」では、生命の操作や地球環境問題など現代の倫理的な諸課題を提起し、その解決に向けて生徒自らの思考を喚起することを通して、生命を尊び、環境を保全する姿勢を培おうとしている（第4号）。	第1章・第2章全体 194～198ページ、 199～203ページ
第3章 第4章 第5章	「現代の家族とその課題」「地域社会の変容と共生」では、現代社会において、家族関係の本来の意義やたがいに支え合う地域社会のあり方を記述し、生徒自らもその構成員であることについて意識を喚起して、男女ともに社会の形成に主体的に参画する態度を養おうとする（第3号）。	204～206ページ、 207～209ページ
第6章 第7章	「グローバル化の時代と倫理」「人類の福祉と国際平和」では、人間が他者とともにによりよく生きる存在であることをふまえ、持続可能な社会の形成と人類の福祉と平和とに貢献してゆくべきことを記述している（第5号）。	第6章・第7章全体 214～216ページ、 217～219ページ

4 上記の記載事項以外に特に意を用いた点や特色

- ▶ 高校生の発達段階を考慮し、本文の叙述・表現にあたっては、平明を旨とした。また、難解な用語には適宜脚注を設け、関連性の高い語には参照ページを付すなど、内容の理解を促進するように配慮した。
- ▶ 文字資料や写真など、本文中に掲載した図版については、生徒の興味・関心を喚起するもの、また先哲の思考や概念の理解を容易にするものを取り入れた。また、生徒の学習意欲を喚起するために、原則としてカラーで掲載している。
- ▶ 冒頭には、序文「地図のない旅」を設け、義務教育の課程を修了した生徒が、はじめて「倫理」を学習するに際して、その意義を共感を持って理解できるように配慮した。
- ▶ 表紙の裏には、「倫理思想史年表」と題して「古代・中世」および「近代・現代」の思想の系統的流れの概略を示し、他教科との連携をはかるとともに、生徒の学習の便宜をはかった。

編 修 趣 意 書

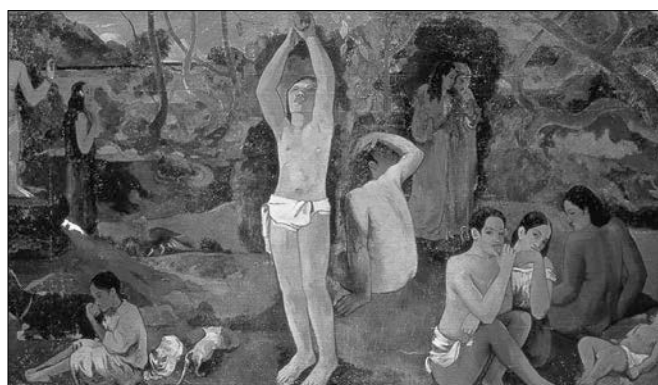
(学習指導要領との対照表, 配当授業時数表)

※受理番号	学 校	教 科	種 目	学 年
	高等学校	公民科	倫 理	
※発行者の 番号・略号	※教科書の 記号・番号	※教 科 書 名		
35 清水	倫 理 308	高等学校 新倫理 新訂版		

1 編修上特に意を用いた点や特色

① 学習の目的を明確に提示 ●●●●

▶本書では、高等学校学習指導要領における目標や各項目の趣旨をふまえながら、「倫理」という種目に対する高校生の興味や関心を喚起してゆくため、各編・章の冒頭に、学習内容と関連の深い写真やリード文を配置してスムーズな導入をはかるとともに、なぜその単元を学ぶのか、学習の目的を明確に提示した。



▲ p. 6, 写真(「われらどこから来たのか われら何であるのか われらどこへ行くのか」(ゴッヤン画))

② 思考を深めてゆく正確な本文記述 ●●●●●●●●●●

- ▶ はじめて「倫理」を学習する高校生が、基礎的・基本的な知識を確実に習得し、先哲の思考に対する理解を深めるとともに、自ら思考する態度を育ててゆくことができるよう、本文の記述・表現に際しては、正確かつ平明を旨とした。
- ▶ 高校生の発達段階を考慮して、紙面構成やレイアウトを工夫し、やや派生的な知識や事からは補説の扱いとする、難解な用語には脚注を設けて具体的に説明する、関連性の高い語には参照ページを付すなど、内容の理解を促進するために、本書全般にわたって配慮している。
- ▶ 高校生が自ら思考することのきっかけともなるように、学習内容と関連する地図や図表、絵画をはじめとする写真などもできるだけ多く掲載している。

▼ p.77, 第3編 扉



プラハの天文時計(1410年作、チェコ) 14, 15世紀のヨーロッパでは、内部の動力によって機械的に動く時計が発明され、各地で製作されるようになった。18世紀ごろまでは、時計は自動機械の典型と見なされ、機械論的自然観では、自然界の現象や人体の構造がしばしば時計に似ていると考えられた。

第1章 現代の倫理的課題



● 私たちはこれまで古代ギリシャの思想を学び、世界三大宗教と古代中国の思想も学んできた。それらの思想は、現在の私たちに与えている影響が重要であるといえる。現代の社会は基本的に、西洋から生まれた近代の社会の延長線上にある。それでは、私たちが近代に近づくにつれて、近代以降の西洋の思想は、どのようなものであったのか。この第3編では、西洋の近代にはじまり、現代へと至る思想を手がかりに、現代に生きる私たちの倫理について考えてみよう。

◎ 『聖アンナと聖母子』(ダヴィッド画) パリ・ルーヴル美術館 聖にあらざるはたき者やして置くこと実行せざるは近世が用いられる。

近代とは何か
近代思想を生み出した。また近代思想によって産み出された西洋近代とは、どのような時代であったのだろうか。私たちがいま生きている社会も、私たちの生活のしかたも、西洋からはじまった近代化という大きな歴史的動向と切り離すことができない。だから、この問題を考えることは、私たちの現在の姿、そのもともとのちからを問うことにつながるはずである。たとえば、私たちは現在、経済的な分野では市場経済を、政治的な領域では議会制民主主義を、学問的な範囲においては自然科学を、あたりまえのことかとして受け入れている。それはかつてない。私たちは遠近法にしがたって描かれた絵画を、和声法に則した音楽を、心地よいものと受けている。これらは、けれども考えようによっては、きわめて特殊な歴史的現象であるともいなければならない。ドイツの社会学者 M. ウェーバーがいうとおり、近代西洋にはじまった**合理化**という歴史的動向の所産にはかからない。ウェーバーが主張するように、ある意味では、なぜ「西」



◎ サンクト・マリヤ・デル・フィオーレ大聖堂(フィレンツェ)。ルネサンスの代表的建築。建築家ブルネッリは、対称と比例の厳格な数学的秩序を重視し、扇形祭壇のすべり台(ドーム)形の建築を設計した。

洋以外では、科学も芸術も国家も経済も、総じて西洋の特色をなしている合理化の軌道によって発展することがなかったのか?が問題となるほどなのである。

それでは、近代化の核心であるといえる**合理化**とは何か。ウェーバーによれば、**脱呪術化**こそがそれである。世界が合理化されるとは、世界から呪術が追放されることである。人々はやがて、たとえば自然の脅威に対抗するために、神や精霊に祈る必要がない。原理的にはすべてが予測可能であり、祈禱することではなく、現象を予測し、説明して、制御することが可能となる。こうした脱呪術化を担ったものは、いうまでもなく、近代における自然科学の発達と、それにもなう技術的手段の発展である。かつてイギリスの歴史家バスターフィールドは、近代科学の成立という17世紀における歴史的出来事そのものを、**科学革命**とよんで、バスターフィールドによれば、科学革命とは、ルネサンス・宗教改革とならんで、あるいはその両者以上に、近代西洋の性格を定めた歴史的できごとなのである。

▶1のちにアメリカの科学史家クーパー(1939)が、この用語を、より一般的な意味で用いるようになる。

▲ pp.78 ~ 79 (第3編 第1章)

第4編 国際社会に生きる日本人の自覚



● 藤田 翠野の自覚(著者:藤田翠野)

▲ p.141, 第4編 扉

③ 時代や地域をこえて思考するテーマページ

- ▶ 「美」「超越的存在」「自然」「ことば」「時間」という普遍的なテーマを設定し、それぞれのテーマをめぐる東洋・西洋の思考を対置するテーマページを設けている。
- ▶ 先哲の思考を系統的に学ぶことを前提としている本書において、編ごとの学習を概括するページとして活用するとともに、高校生が時代や地域の枠をこえて自由に思考をめぐる、思考を深めつつ、さまざまな言語活動を通してそれを表現してゆく態度を培うように配慮している。

<テーマページ一覧>

- ・ 東洋と西洋の思考 1
美をめぐる思考 — 美と「倫理」とのかかわり
- ・ 東洋と西洋の思考 2
超越的存在をめぐる思考 — 東西の「神」
- ・ 東洋と西洋の思考 3
自然をめぐる思考 — 生命的自然と物質的自然
- ・ 東洋と西洋の思考 4
ことばをめぐる思考 — ことばとともにあること
- ・ 東洋と西洋の思考 5
時間をめぐる思考 — 流れと永遠

美をめぐる思考 美と「倫理」とのかかわり

私たちは、日常生活の中で、「美」とか「美しい」といったことばを、ごくふつうに使っている。しかし、あらためて美とは何であるかと思われれば、おそらく誰もが説明に窮してしまうだろう。知っているけれど、うまく説明のできない「美」というものをめぐって、先人は、さまざまな思索を繰り返してきた。

西洋においては、美をめぐる思考は、客観主義の視点と主観主義の視点という、大きく分けたふたつの方向へ展開してきた。古代ギリシアでは、美は、人体をもふくめた事物の客観的性質と考えられた。美とは、理想的基準(カノン)としての人体比や黄金比にいたがり、均衡、調和、秩序であり、この調和の原理が、美しい統一の全体としてのコスモス(宇宙)を作りあげていくとされた。古代末期には、プラトンの美としての美を創造力と見なす考えがプロティノスによって示され、この力(光)による魂や精神性の表現としての「隠き」が、中世美学の中心的主題となった。

近代に入ると、美は、それを感じ、創造する個人(主観)の問題として考察されるようになる。美しい事物に共通する客観的性質は客観的には存在せず、美は自然や芸術作品に対するときの個人個人の感じのなかにもあるもの、つまりは個人個人の感情の特殊な性質や独自の感情(後の感情)であるとされる。ドイツの哲学者カントは、美的判断を、主観的でありながら「趣味判断」として見なした(『判断力批判』)。人には、各々各々の趣味があり、趣味を争うことではないと考えられたのである。

しかし、美的判断はたんなる個人的判断に終止するのではない。人が何かを美しいと思うとき、そこにはいつか、他者が賛同してくるであろうという期待が伴っている。じつは、

カントもこのことを認めている。美は、個人的・主観的なものであると同時に、他者との共通を求めた人間性ありとも深く結びついたものである。そうであるなら、そもそも美をめぐる思考は、他者とともに生きるあり方、すなわち「倫理」の探究と不可分のものであるといえるだろう。

一方、東洋の伝統においては、美の問題は、道の探求の一端として考察されてきた。中国では、天や自然の道と一致したあり方があると考えられた。たとえば『礼記』の音楽論では、「楽は倫理に通ずるもの」であり、正しく美しい音楽は、人々の親愛相和をもたらすものであるとされた。

日本においても、美は、神仏や天地の道と深くかかわるものと考えられ、ときには美の探求そのものがひとつの道(芸術)であると考えられていた。たとえば、清らかな美しさをとらえとする美意識は、神信仰に寄する清明心の道徳と深く結びついている。また、簡素・清貧の境地に美を見いだす「わびさび」の精神には、無常や空の思想がふまえられている。色彩を否定した水墨画や枯山水、花も紅葉もいっさいの美しさや詠み歌、あるいは、動物や植物の命の「せめがけの白き」とする芭蕉翁の俳句など、未知や不足のうちに美を見出している。日本に伝来した仏教の思想に登場する。

『徒然草』には、こうしたいわゆる「否定の美学」は、美意識であると同時に、それ自体がひとつの悟りの境地である。ここには、事物の客観的性質ではなく、また人間の主観的感性までもない、自己と道、主観と客観が一体となった境地に美を見いだす、もうひとつの立場があらわれているのである。

▶1 文芸評論家、日本の伝統芸術を系統的に探究する多くの評論をあらわした。著書に『中世の文学』『無常の道』『日本人の心の歴史』など。

▲ pp.74 ~ 75 (東洋と西洋の思考 1)

時間をめぐる思考 流れと永遠

「いつか時間とはなんだろう。だれも私にたずねないし、私は知っています。たずねられて説明しようと思っても、知らないのです」(アウグスティヌス『告白』)。古来、時間とは人間にとって永遠な謎である。

時間とは、未来や現在や過去のことだ、といわれるかもしれない。しかし、過去は「もうない」、未来は「まだない」、人はつねに現在に生きているのであり、過去や未来は自己がいまここから思い描くものでしかない。たとえばアウグスティヌスはそのように考え、過去は記憶であり、未来は予期であり、現在とは注視(知覚、直観)であると述べている。





東洋でも、たとえば道元は、時間と流れは去るものであるという「去来(来)の相」を否定する。自分がつねに現在の瞬間は、過去から未来へと延びる連続した流れのなかの一点ではない。この瞬間のうちで世界全体が立ち現れているのであり、自己を介して世界の存在と時間とは一体のものである(『正法眼蔵』)。それゆえ、道元は過去にたがうなら、本来の時間とは、去来の相を超えて永遠であるような「いま」を指すことになる。

この二人の特質な時間論に共通するのは、自己の生き生きたとした体験や行為と不可分のものとして時間をとらえる視座である。これと対照をなすのは、天体の動きのような、自己のあり方とは無関係の周期的運動に、時間の本質を見る思想である。たとえばアリストテレスは、「時間とは、前と後に関する運動の数である」と定義し、連続した運動が切り取られるところに時間の成り立ちを見ている(『自然学』)。この、誰にとっても一様に流れる均質な時間という像は、周期的運動を数に置き換える「時計」という装置に合わせて生活を営む現代人にとっては、ごく一般的な見方だといえるだろう。しかし、小林秀雄は、そうした「過去から未来に向かって流れるように延びる時間」という普遍的な思想は、「現代における最大の思想」と批評する。この思想(思想)においては、自己が無心にも見つめてたどる先実した瞬間が存在しない。それゆえ、その瞬間のうちにある「常なるもの(永遠)も見失われてしまうという『無常といふ事』」。小林も道元と同様に、本来の時間を流れとしてではなく、むしろ永遠の下の下にとらえるのである。

▲ p.192 (東洋と西洋の思考 5)

2 対照表

図書構成・内容	学習指導要領の内容	該当箇所	配当 時数
第1編 現代に生きる自己の課題	(1) 現代に生きる自己の課題		(4)
第1章 人間とは何か		6～8ページ	1
第2章 青年期の課題と自己形成			3
1 青年期の意義		9～11ページ	
2 自己の理解に向けて		12～15ページ	
3 豊かな自己実現のために		16～20ページ	
第2編 人間としての自覚と生き方	(2) 人間としての在り方生き方		(16)
第1章 人生における哲学	ア 人間としての自覚		4
1 神話から哲学へ		22～23ページ	
2 自然哲学の誕生とソフィスト		24～26ページ	
3 真の知への道ーソクラテス		26～29ページ	
4 理想主義的なあり方ープラトン		30～32ページ	
5 現実主義的なあり方ーアリストテレス		33～35ページ	
6 幸福を求める問いーヘレニズムの思想		35～37ページ	
第2章 人生における宗教			
第1節 キリスト教ー愛の宗教	▲ p.29, 写真(「毒杯を手に、弟子たちに別れを告げるソクラテス」)		4
1 ユダヤ教		38～40ページ	
2 イエスの思想		41～44ページ	
3 世界宗教への展開		45～47ページ	
第2節 イスラームー啓示と戒律の宗教		48～50ページ	4
第3節 仏教ー智慧と慈悲の宗教		51～53ページ	
1 パラモン教		53～57ページ	
2 仏陀の思想		57～60ページ	
3 仏教のその後の展開	▶ p.48, 写真(「『クルアーン』」)		
第3章 人生の知恵			3
1 孔子と儒家の思想		61～64ページ	
2 儒教の展開		64～67ページ	
3 道家の思想		68～69ページ	
第4章 人生における芸術			
東洋と西洋の思考1 美をめぐる思考ー美と「倫理」とのかかわり		74～75ページ	
東洋と西洋の思考2 超越的存在をめぐる思考ー東西の「神」	▲ p.58, 写真(サーンチーの仏塔)	76ページ	

図書構成・内容	学習指導要領の内容	該当箇所	配当 時数
第3編 現代社会と倫理	(3) 現代と倫理		(24)
第1章 現代の倫理的課題	ア 現代に生きる人間の倫理	78～81ページ	1
第2章 現代に生きる人間の倫理			
第1節 人間の尊厳		82～84ページ	2
1 自己肯定の精神		85～87ページ	
2 宗教観の転換		87～89ページ	
3 人間の偉大と限界		90～91ページ	
第2節 自然や科学技術と人間とのかかわり	▲ p.82, 写真 (ダンテ, 『神曲』の詩人)	91～92ページ	3
1 自然への目と科学的なものの見方		93～96ページ	
2 事実と経験の尊重		97ページ	
3 理性の光			
東洋と西洋の思考3	▲ p.90, 写真 (ニュートン) ▲ p.105, 写真 (カント)	98～99ページ	3
自然をめぐる思考—生命的自然と物質的自然		99～102ページ	
第3節 民主社会における人間のあり方		103～106ページ	5
1 民主社会の原理		107～109ページ	
2 人権思想の展開		110～112ページ	
第4節 自己実現と幸福		112～113ページ	
1 人格の尊重と自由	▲ p.128, 写真 (アメリカの公民権運動)	114～116ページ	6
2 自己実現と自由		117～124ページ	
3 幸福と功利		125～128ページ	
4 創造的知性と幸福		129～131ページ	
第5節 個人と社会とのかかわり		132ページ	4
1 人間性の回復を求めて—社会主義	▶ p.126, 写真 (アーレント)	133～137ページ	
2 人間存在の地平—実存主義		137～138ページ	
3 他者の尊重		138～139ページ	
4 社会参加と他者への奉仕		140ページ	
第6節 現代における理性の問題			
1 生命への畏敬			
2 理性主義の見なおし			
3 言語論的転回			
4 科学観の転換			
東洋と西洋の思考4			
ことばをめぐる思考—ことばとともにあること	<div data-bbox="751 1738 1406 1939" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>反証可能な言説 例: すべてのアヒルは白い。 ← 黄色いアヒルもいる。</p> <p>白くないアヒルが一羽でもいれば反証される。</p> <p>反証不可能な言説 例: 死後の世界は存在する。 ← × いかなる実験や観察によっても反証されない。</p> </div>		
	▲ p.139, 図 (ポパーによる反証主義)		

図書の構成・内容	学習指導要領の内容	該当箇所	配当 時数
第4編 国際社会に生きる 日本人の自覚			(18)
第1章 日本の風土と外来思想の受容	(2) 人間としての在り方生き方 イ 国際社会に生きる日本人の自覚		2
第1節 日本の風土と伝統 1 日本の風土と人々の生活 2 古代の人々の考え方	 <p>▲ p.152, 写真 (延暦寺根本中堂)</p>	142～145ページ 145～148ページ	4
第2節 仏教の伝来と隆盛 1 仏教の移入－古代仏教の思想 2 仏教の土着化－鎌倉仏教の思想		149～153ページ 154～160ページ	
第3節 儒教の日本化 1 儒教の伝来と朱子学 2 陽明学 3 古学	 <p>▲ p.168, 写真 (竜安寺の石庭)</p>	161～163ページ 163～164ページ 164～167ページ	2
第4節 日本文化と国学 1 古典美の再発見 2 国学		168～169ページ 170～171ページ	2
第5節 近世庶民の思想 1 都市庶民の思想 2 農民の思想		172ページ 173ページ	2
第6節 西洋近代思想の受容 1 西洋文明との接触 2 啓蒙思想と民権論 3 キリスト教の受容 4 国家主義の高まりと社会主義 5 近代的自我の成立 6 近代日本哲学の成立 7 近代日本の思想傾向への反省		174～176ページ 176～179ページ 179～180ページ 180～182ページ 183～185ページ 186～187ページ 188～189ページ	5
第2章 現代の日本と日本人としての自覚	<p>▶ p.175, 写真 (『解体新書』の扉絵)</p>	190～191ページ	1
東洋と西洋の思考5 時間をめぐる思考－流れと永遠		192ページ	
第5編 現代の諸課題と倫理	(3) 現代と倫理		(8)
第1章 生命と倫理	イ 現代の諸課題と倫理	194～198ページ	3
第2章 環境と倫理		199～203ページ	
第3章 現代の家族とその課題		204～206ページ	3
第4章 地域社会の変容と共生		207～209ページ	
第5章 情報社会とその課題		210～213ページ	
第6章 グローバル化の時代と倫理		214～216ページ	2
第7章 人類の福祉と国際平和		217～219ページ	
		計	70